

Prāśastapādabhāṣya における認識の因果論的区別

三 浦 宏 文

はじめに

インド正統派六派哲学の一つである Vaiśeṣika 学派を体系化した *Prāśastapāda* は、因中無果論 (*asat-kārya-vāda*) という因果論を認識論に積極的に取り入れて緻密な体系を構築した。本稿では、この *Prāśastapāda* の主著 *Prāśastapādabhāṣya* (A.D. 6C. 以下 *PBh*)¹⁾ における認識論と因果論の関係について、*PBh* の諸注釈の中で因果論に関して最も言及している *Vyomaśiva* の *Vyomavati* (A.D. 10C. 以下 *Vy*) を中心に参照しつつ考察したい。

1 因果関係を記述する文型

Vaiśeṣika 学派では、原因を内属因 (*samavāyi-kāraṇa*) と非内属因 (*asamavāyi-kāraṇa*) と動力因 (*nimitta-kāraṇa*) の 3 種類に分ける。*PBh* では、これらの用語自体はあまり出てこないが、それに対応する概念があったことは宮元啓一の詳細な研究で明らかにされている²⁾。また、大綱功は、これを運動論に適用し、運動論が因果論をもとに構成されていることを明らかにした³⁾。基本的に、*PBh* の因果論を説明する箇所の手書き原文では、*-apekṣa* (あるいはその派生語) と伴われた文型で示されるのが動力因、同じ文の中で Ablative で示された語が非内属因を表すという形になっている。

2 各認識形態と因果関係を記述する文型

ここでは、*PBh* の認識論の中で正しい知識に分類される直接知覚 (*pratyakṣa*) ・推論 (*anumāna*) ・記憶 (*smṛti*) ・聖仙知 (*ārśajñāna*) の 4 つについて検討していきたい。

2-1 直接知覚 (pratyakṣa)

Vaiśeṣika 学派では、直接知覚は対象 (viṣaya) - 感覚器官 (indriya) - 自我 (ātman) - 意識 (manas) の4者の接触によるとされる。PBhでは、この前述の4者(対象・感覚器官・自我・意識)の接触が成立した後に、以下のように述べられている。

[235] sāmānya-viśeṣa-dravya-guṇa-karma-viśeṣaṇa-apekṣād ātma-manah-sannikarṣāt pratyakṣam utpadyate sad dravyam prthivī viṣāṇī śuklo gaur gacchati_iti | (PBh(1): p. 186, ll. 16 ~ 19.)⁴⁾

普遍・特殊・実体・属性・運動といった限定を待って、自我と意識の接触から、「存在し、実体であり、地であり、角を持つ、白い牛が歩く。」という直接知覚が生じる。

文型と Vy の記述から見て「自我と意識の接触が非内属因」であり、「普遍・特殊実体・属性・運動という限定」が動力因である⁵⁾ 上述の形が、因果論を表す基本となる文型である。

2-2 推論 (anumāna)

PBh の本文で、推論全体に関する因果関係の記述は、これだけである。

〈100〉 [246] līṅga-darśanāt samjāyamānaṁ laiṅgikam || (PBh(1): p. 200, l. 4.)

徴証 (līṅga) をみることから、推論された (知識) が生じる。

しかし、この箇所 of Vy の注釈には以下の記述がある。

para-āmarśa-jñānaṁ vā līṅga-darśanād yathā-ukta-viśeṣaṇa-jñānaṁ utpadyate sādḥakatamatva-apekṣya anumānam | (Vy: Vol. 2, p.147, ll. 19 ~ 20.)

過去と接触する知、あるいは、徴証をみることから、前述した限定する知のように、最も効果的であることを待って、推論が生じる。

この文型は、PBh の基本的な因果論の記述と同じ文型である。また、ここでの「過去と接触する知」は、例えば煙に対する火の記憶のことである。この Vy の記述を合わせて考えれば、非内属因は「徴証をみること」であり、動力因は「最も効果的であること (sādḥakatamatva)」である。

2-3 記憶 (smṛti)

記憶は過去に関する認識であり、正しい知識には挙げられつつも認識手段には挙げられないという、PBh の認識論上独自の位置を占める。

〈121〉 [287] līṅga-darśana-icchā-anusmaraṇa-ādy-apekṣād ātma-manasoḥ samyoga-viśeṣāt paṭy-abhyāsa-ādara-pratyaya-janitāc ca saṁskārād dṛṣṭa-śruta-anubhūteṣv artheṣu śeṣa-anuvyavasāya-icchā-anusmaraṇa-dveṣa-hetur atita-viṣayā smṛtir iti || (PBh(1): p. 256, ll. 17 ~ 20.)

記憶とは、徴証をみることや欲求や追想等を待つて、自我と意識の特殊な結合から、そして、強烈さや反復や留意といった観念から生じた潜勢力 (saṃskāra) から、生じる。見たり聞いたり経験したりする対象において、残余の確認 (śeṣa-anuvyavasāya) と願望と追想の原因であり、過去の対象 (に関する知識) である。

これによれば、非内属因は「自我と意識の特殊な結合」であり、動力因は「徴証をみること・欲求・追想」である。ここでは、その「自我と意識の特殊な結合」に続いて「強烈さや反復や留意と行った観念から生じた潜勢力 (saṃskāra)」が Ablative であげられているが、*ly* によれば動力因である⁶⁾。-apekṣa という語に伴われた文型で示される動力因だけでなく、Ablative の形で非内属因と動力因を列挙する文型は、前述までの文型とは異なる。また、ここでは、「自我と意識の〈特殊な〉結合」とされ、通常の「自我と意識の結合」とは区別されているところに注目すべきである。

2-4 聖仙知 (ārṣajñāna)

聖仙知は、聖仙などに特徴的な特別な認識である。

〈122〉 [288] āmnāya-vidhātṛñām ṛṣiñām atīta-anāgata-vartamāneṣv atīndriyeṣv artheṣu dharmādiṣu grantha-upanibaddheṣv anupanibaddheṣu ca ātma-manasoḥ saṃyogād dharma-viśeṣāc ca yat prātibhaṃ yathā-artha-nivedanaṃ jñānam utpadyate tad ārṣam ity ācakṣate | (*PBh(I)* : p. 258, ll. 1 ~ 5.)

聖典の創造者である聖仙達に、(1) 過去・現在・未来のことがらにおいて、(2) 超感覚的なことがらにおいて、(3) 法などにおいて、(4) 書物に記録されたものでも記録されていないものにおいても、自我と意識の結合から、そして特殊な法から、直観的で対象をそのまま伝える知識が生じる。これが、聖仙知 (ārṣa) である。

文型と *ly* の記述から、「自我と意識の結合」が非内属因である⁷⁾。ここでは、-apekṣa という語に伴われる文型で示される動力因の記述はないが、*ly* によれば動力因は「特殊な法」である。このように、非内属因と動力因が *ca* で結ばれた形で並列的に Ablative で記述される文型は、記憶と同様である。このことから過去時の認識である記憶や特別な認識である聖仙知が、通常の現在時の認識と区別されていることがわかる。

3 結語

3-1 認識論と因果論の対応

以上のように見てくると、PBh の各認識形態には因果論的な区別が対応していることが、そのサンスクリット原文の文型によってわかる。

まず、あらゆる認識によって得られた知識 (buddhi) は、自我 (ātman) の属性であるので、共通の内属因は、自我である。そして、推論以外の諸認識は、「自我と意識 (manas) の結合」という非内属因から起こる。その際、過去に関連する記憶は、非内属因に〈特殊な〉という限定がつく。特別な認識である聖仙知は、-apekṣa という語に伴われない形で Ablative で非内属因と動力因を併記するという形の文型を取るのである。

《各認識形態と非内属因・動力因の表現文型の対応関係》

認識形態	非内属因	動力因の表現文型
直接知覚	自我と意識の結合	-apekṣa という語に伴われた文型
推論	徴証をみること (= 直接知覚)	(注釈に) -apekṣa という語に伴われた文型
記憶	自我と意識の「特殊な」結合	-apekṣa という語に伴われた文型
聖仙知	自我と意識の結合	Ablative で併記

このように、各認識形態によって、原因を記述する文型も区別されているのである。

3-2 現在時の認識（直接知覚・推論）の優位性

またさらに、この因果論的区別から、PBh の認識論では、諸認識形態の中でも現在時に関係する直接知覚及び推論が基本になっていることがわかる。

(1) 直接知覚は、運動やその他の因果関係の表記法と共通する PBh の術語化した因果関係の表記法で表記されている。(2) 推論は、出発点として「徴証をみる直接知覚」が前提されるので、非内属因が他の認識と区別されるが、直接知覚に準じたものと考えてよいであろう。その証拠に、推論は認識手段として認められている。(3) 記憶は、非内属因に〈特別な〉という限定をつけることで、他の認識とは区別した形で表記される。記憶が正しい知識に分類されながらも、直接には認識手段とされないのは、その記憶が推論に関連し、正しい推論過程を経た上で、推論の結果の知識として成立するからである。(4) 聖仙知は、動力因を Ablative で併記

tive で併記する形で表記され、通常の認識とは明らかに区別されている。また、この聖仙知も記憶同様に認識手段として認められていない。これは、聖仙知が一般に認知されるためには、その聖仙知の知識が「他人のための推論」によって論証されなければならない。だとすると、最終的には、推論の結果の知識として成立することになり、認識手段はこの場合推論になってしまうからであると考えられる。

このように、*Prāśastapāda* の認識論では、あくまで現在時の認識が基本にあり、それ以外の認識とは厳密に区別されていたということが、この因果論的側面からわかるのである。

◆略号表 *PBh(1)* : *The Prāśastapāda Bhāṣya with Commentary Nyāyakandalī of Śrīdhara*, Edited by Vindhyasvari Prasad Dvivedin, Banaras, 1895, (Reprint, Delhi, 1984). *PBh(2)* : *Nyāyakandalī being a commentary on Prāśastapādabhāṣya*, with three sub-commentaries, Edited by Late Dr. J. S. Jetly, and Vasant G. Parikh, Oriental Institute, Vadodara, 1991. *Vy* : *Vyomavati of Vyomaśivācārya (2vols.)*, Edited by Gaurinath Sastri, M. M. Sivakumāraśāstri-Granthamālā [Vol. 6], Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, Varanasi, 1983 ~ 84. *WPR* : *Word Index to the Prāśastapādabhāṣya, A complete word index to the printed editions of the Prāśastapādabhāṣya*, Edited by Johannes Bronkhorst and Yves Ramseier, Motilal Banarsidass Publishers Private Limited, Delhi, 1994.

1) *Prāśastapādabhāṣya* のテキストは、略号表 *PBh(1)* を底本に使用し、*PBh(2)* を適時参照したが、異同がある場合はおおむね *WRR* に従った。 2) Miyamoto, Keiichi: "The Early Vaiśeṣika on asamavāyikāraṇa and the Term *apekṣa*," 『インド思想と仏教文化——今西順吉教授還暦記念論集』春秋社・1996 年参照。 3) 大綱功「インド運動論と因果論」『科学史研究』第 38 巻 (No.211)・日本科学史学会・岩波書店・1999 年参照。 4) 訳文中の () の中の語は、理解のために補った言葉、あるいはサンスクリット語の原語である。また、サンスクリット原文を表記する際、複合語は術語化しているものを除いて原則単語で区切りハイフンでつないだ。また連声を切って元に戻したときには、アンダーバーでつないだ。以下同じ。サンスクリット原文の番号は、〈 〉で囲まれたものは *PBh(1)* によるもの、[] に囲まれたものが *WPR* によるものである。 5) *Vy*: Vol.2, p.142, ll.5 ~ 7. 6) *Vy*: Vol.2, p.212, ll.8 ~ 11. 7) *Vy*: Vol.2, p.214, ll.4 ~ 5.

〈キーワード〉 *Vaiśeṣika*, *Prāśastapāda*, 6 世紀, 認識, 因果論

(東洋大学東洋学研究所 奨励研究員・博士 (文学))

been **(á)dbd^ha-* (< **-d^hb^hta-* through Bartholomae's rule) on the basis of Young Avestan *abda-* 'wonderful'. OIA. *á-dabdhā-* and JAv. *dapta-* 'deceived' are innovated by introducing the full grade root form. In the case of *ádbhuta-*, the root consonants as well as the formant *-ta-* are reserved by *-u-*, which is gained through the re-interpretation of the pres. **db^hnáy-/db^hnu-* as a *-n-* infix-present **db^hnáy-/db^hn-u-*. The original meaning is held by *á-dabdhā-* and *dapta-*, which seem to be younger forms, while somewhat older *ádbhuta-* and *abda-* are charged with the derived meaning. Also the adverb OIA. *addhā* and OAv. OPers. *azdā* 'obviously, clearly' are examined, considering the problem of simplifying the three plosives group. They go back most probably to **ad* 'this' + *-dhā*, in spite of the common opinion today. (Detailed discussions are to be published in German in Fs. Klingenschmitt.)

59. The Causal Distinction of Cognition in *Praśastapādabhāṣya*

Hirofumi MIURA

Praśastapāda, who organized the Vaiśeṣika philosophy, constructed his epistemology following in the tradition of *Vaiśeṣikasūtra* (A.D.1c.). He also adopted the causal theory of non-existence of effects (*asat-kārya-vāda*) in his epistemological system. In this paper, the author intends to consider the relationship between Praśastapāda's epistemology and causality in his main work, *Praśastapādabhāṣya* (A.D.6c.).

We can see the three kinds of causes in *asat-kārya-vāda*. The first is the intimate cause (*samavāyi-kāraṇa*), the second is the non-intimate cause (*asamavāyi-kāraṇa*), the third is the efficient cause (*nimitta-kāraṇa*). These causes and their expressions correspond to the distinction of cognition in Praśastapāda's epistemology.

In direct cognition (*pratyakṣa*), non-intimate cause is the contact with *ātman* and *manas*, and efficient cause is expressed with the term *apekṣa*. But non-intimate cause means to see the sign (*liṅga*) in inference (*anumāna*). In memory (*smṛti*), non-intimate cause also means the ⟨special⟩ contact with *ātman* and *manas*. In the saint's cognition (*ārśajñāna*), both causes are ex-

pressed in ablative form.

From these points, we can conclude that Praśastapāda's epistemology parallels the distinction of causes in his causality.

60. Similes used by Śaṅkara: the simile on the ocean

Tatsuoki KATŌ

This article studies a simile of the ocean found in the *Yogaśāstravivaraṇa* with a view to comparative research. I research similar similes discovered in Śaṅkara's works, in order to solve the vexed problem of the authorship of the *Yogaśāstravivaraṇa*.

61. Udayana and Prajñākaragupta: A Sanskrit Fragment of the *Pramāṇavārttikālaṃkāra* Found in the *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi*

Kōji EZAKI

Both in Udayana's *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* (NVTP) and in Ratnakīrti's *Īśvarasādhana-dūṣaṇa* (ĪSD), the following Sanskrit fragment of Prajñākaragupta's *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (PVA) is found:

yatkincid ātmābhimataṃ vidhāya niruttaras tatra kṛtaḥ pareṇa /
vastusvabhāvair iti vācyam itthaṃ tadottaraṃ [ĪSD: tathottaraṃ] syād vijayī sa-
mastaḥ //

While Prajñākaragupta states this verse and Ratnakīrti quotes it in the context of the refutation of Naiyāyikas' proof of the existence of God (*īśvara*), Udayana refers to it in the context of the refutation of the Buddhist view of unreality. The question arises: What is Udayana's intention in quoting the passage from PVA?

The key to the answer to this question is the word '*svabhāvavāda*', which occurs in the passage of Jñānaśrimitra's *Vyāptīcarcā* (VC) or Ratnakīrti's *Vyāptinirṇaya* that is cited by Udayana in his NVTP immediately before the citation of the present verse of PVA. The word '*svabhāvavāda*' in the very passage should be taken as signifying 'to speak of the essence of a thing' or